

自然種名の指示について

四 津 雅 英

1. 初 め に

自然種名¹⁾の指示についての記述説(自然種名が指示する²⁾のは、結びつけられている記述を充たすもの、ないし記述群の大半を充たすものだとする説)に対するクリプキとパトナムの批判³⁾は、多くの論者(全てではないが)⁴⁾に受け容れられたが、それを受け容れてもなお、様々な問題がある。例えば次の問題がある——現代なら少なくとも専門家は、現代科学の知識や手法を用いて水などの判定を行えるが、科学が未発達な時代(我々が用いている自然種名の多くは、そうした時代にまず導入された)には、専門家でさえ、

1) この「自然種名」という言い方自体に問題がある。特に本論文で後に問題となるのは、一般に自然種名とされるものには、自然種を指示しているかどうか、人によっては疑問を持つものも含まれるということである。最初は暫定的に、物質種名(「水」「金」など)や生物種名(「虎」「ブナ」など)などを表すものとする。各主張を検討する中で、どれが真の意味で自然種名なのか次第に明らかになるであろう。

2) 本論文では、個体定項と指示対象の間の関係だけでなく、記述と表示対象の間の関係、述語と外延の間の関係、述語と、その外延に含まれる対象の全てかつそれらのみが成員である種の関係(「その分子が水素原子二つと酸素原子一つからなる」と、 H_2O の関係)なども指示関係として扱い、「aはbを指示する(表す、指す)」と言えば、aとbの間にこれらの関係のどれかが成立していることを表す。この扱いは、この種の議論では普通に見られる(「ある種の確定記述は、全ての可能世界で同じ対象を指示する」と言う人が、「ある種の確定記述は、個体定項と見なされる」と考えているとは限らない)が、ラッセルのようにこの内の一部のみを指示関係とする人もいるため、あえて断っておく。

3) その見解は周知のように、主にクリプキの*Naming and Necessity* (NNと略)とパトナムの*"The Meaning of 'Meaning'"* (MMと略)で示された。

4) 記述説論者でもサール(1983, chap. 8)などのように、記述説を放棄はしないが、彼らの議論を少なくとも部分的には受け容れる者が少なくない。

水などの判定に利用できる科学的知識や手法は限られていた。当時の人が、 H_2O (原子などについての知識なしには、厳密な判定がまず不可能な種)などを表す名辞を導入することはできたのか。

以下では自然種名の指示の問題を、主にこの観点から検討する。指示だけでも考察すべき点は少なくないため、意味の問題(何らかの記述と同義か、その意味論的身分をどう考えるかなど)の検討は、今後の課題としたい⁵⁾。

2. クリプキ-パトナム見解⁶⁾ (指示の理論としての⁷⁾)

クリプキとパトナムは、自然種名の指示についての記述説を批判するが、中でも次の二つの議論が重要である。

(1) 記述説が正しければ、自然種名の外延に含まれるものは結びつけられている記述や記述群を充たすということと、それらの記述や記述群を充たすものは外延に含まれるということは、その一方ないし両方が誤りだと判明することは決してない。しかしこれは往々にして正しくない。

(2) 記述説が正しければ、自然種名の外延に含まれるものは結びつけられている記述や記述群を充たすということと、それらの記述や記述群を充たすものは外延に含まれるということは必然的である。しかしこれは往々にして正しくない⁸⁾。

5) ここで論ずる問題は、意味の問題に劣らず重要である。人々が用いる自然種名を、例えば第一義的には種を名指す個体定項であるとして、満足の行く分析が得られたとしても、それをどのようにして導入したのかを満足以説明できなければ、人々が現実導入し用いる自然言語の分析としては不十分である。

6) 以下K-P見解と略。

7) K-P見解は意味の理論としての側面も有するが、本論文では指示の理論としての側面のみに触れる。

8) 例えば自然種名に結びつけられている記述が、それが表す種の成員と見なされてきた大半のものによって共有されている、根本的性質に常に伴う性質の記述であれば、K-P見解においても、自然種名の外延に含まれるものがその記述を満たすことは必然的であり、それが誤りだと判明することもない。しかし記述説が正しいならば、根本的性質と関係あろうとなかろうと、外延に含まれるものがその記述を充たすことは必然的であり、それが誤りだと判明することもないことになる。

これらの議論は、個々の使用者が結びつけている記述などだけでなく、言語共同体内の専門家が結びつけている記述などを持ち出す場合にも当てはまると考えられる。

では自然種名の指示は、どのように決まるのか。それは、以下のようにだと彼らは考える——ある言語共同体で、自然種名が表す種の成員と見なされてきたものの大半が、経験的探究のみが解明できるある根本的性質を共有するならば、その自然種名が表すのは、その性質によって特徴づけられる種(その性質を有することが、その種の成員であるための必要十分条件である種)である。この根本的性質には、物質の場合化学的組成、生物の場合遺伝子構造などが考えられる(ただし後の経験的探究で、別の性質がそうであるとされるかもしれない(MM, p. 225参照))⁹⁾。

この見解によれば、科学的知識の乏しい人々が金であるとしてきた物体の大半が元素Auであれば、人々は「金」でAuを表している。人々が金かどうかの判断をする際の基準となる表面的特徴は、直接金であるための必要十分条件には関わらず、ただその表面的特徴で選ばれた諸物体の大半が有する根本的性質が必要十分条件となる、という形でのみ関わる。人々が原子などについて何も知らないのに、「金」は、これこれの表面的特徴で選ばれるものの大半が共有する化学的組成が、その外延に含まれるための必要十分条件であるようなものである」のようにして自然種名を導入することができるか疑われるかもしれない。もちろんこうした明示的定義による導入は、その人々には不可能だろう。しかし、クリプキやパトナムはこのことが問題になるとは考えない。金なら金について、これらは外見だけでなく何らかの内的構造を共有していると想定し、その構造を共有しなければ同種ではないと想定する¹⁰⁾ことは、その人々にもできると考えられるからである(NN, p. 121; MM, pp. 237-8)。

K-P見解は、科学的知識の乏しい人々が、化学的組成などで特徴づけられる種をどのようにして表せるのかについて、一つの説明を与えている。し

9) ここではクリプキとパトナムの見解を区別せずに述べたが、ブラウンは両者の見解に留意すべき差があると見る。注21参照。

10) 必要なのは導入時このように明確に想定することではない。諸事例において、こうした想定に沿った判断をする傾向性を有すればよい。

かしK-P見解には、特に重要な問題として、自然種のレベルの問題と混合物の問題がある。それらを次節で検討する。

3. K-P見解の問題点、識別能力説、純粋性に関する想定説

3-1. 自然種のレベルの問題¹¹⁾

3-1-1. 問題の概要 ものとは普通複数の自然種に属する。K-P見解では、「金」の指示は金と見なされてきたものの大半が有する根本的性質で決まるが、それらはAuであるだけでなく、より上位の自然種(1B族の元素、金属など)にも、より下位の自然種(Au¹⁹⁷、他の同位体は、自然状態では現れない)にも属する。K-P見解は、このような場合自然種名がどのレベルを表すのか、答えられないように思われる。

これに対し、例えば物質種名に関して、指示対象は化学的組成(Au・H₂Oなど)で特徴づけられるレベルで固定されていると考えようとする、問題となるのはダイヤモンドである。ダイヤモンドの成分は炭素である。問題となるのが化学的組成のレベルに限られるならば、ダイヤモンド=炭素となる。しかし、ダイヤモンドと見なされてきたものの大半が炭素だと判明して以来、炭や鉛筆の芯もダイヤモンドだと認められるようになった、とは聞かない。

さらに生物種名の事例を考えると、特定のレベルに固定するのは絶望的に思われる。「犬」「虎」は分類学上の種 speciesを表すが、「イルカ」「熊」は科を表し、「兎」は目を表す。生物種名が表すレベルが、どれかに前もって固定されているという見解は、現実に用いられている生物種名の指示を満足に説明できないように思われる¹²⁾。

3-1-2. 識別能力説 この問題に、ブラウンは識別能力の概念を用いて

11) これはBrown, 1998以前にも、ドネラン(1983, pp. 97ff.)ら多くの人が指摘している。

12) またパトナムはこの問題に関して、別の回答を用意していると見なせるかもしれない。MM, pp. 237-8の一節は、自然種名は、そう呼ばれてきたものの大半が属する最も下位の種を表すという主張と解釈できるかもしれない。しかしこれでは「金」はAu¹⁹⁷を表すことになるし、ツキノワグマしかいない地域で用いられる「熊」は、分類学上の科に当たる熊を表せない(ホッキョクグマは外延に含まれない)。

答える^{13, 14)}。自然種名の指示は、どんな識別能力¹⁵⁾に基づいて用いられているかで決まる。自然種名が表す種は、その識別に用いられている表面的特徴を、現実の日常的環境下¹⁶⁾でもたらしめている根本的性質で特徴づけられるような種(その根本的性質を有することが、成員であるための必要十分条件であるような種)である(Brown, 1998——以下NKTRCと略, p. 284)¹⁷⁾。言語共同体LCで「ダイヤモンド」を、周知の外見的特徴による識別能力に基づいて用いれば、その外見的特徴は炭素であるだけではもたらされないので、ダイヤを指していると言える。

しかしダイヤと日常生活レベルで区別のつかない、化学的組成などの異なるものを、LCの人々はダイヤと見分けられないので、人々の言う「ダイヤモンド」にはそれも含まれるのではないか。しかし、必要なのは日常的環境での識別能力である。日常的環境にそのようなものが相当量なければ、この説ではそれらはダイヤに含まれない。

13) 識別能力の概念を用いる発想はブラウン以前にも、Evans, 1982やMiller, 1992などに見られる。しかしエヴァンズはごく簡単にしかこの立場を述べていない。ミラーは純粋な因果説の立場からこれを述べており、この立場につきものの選言の問題などに直面する。ブラウンは純粋な因果説をとっておらず、そうした問題に直面しないと考えられる。

14) ブラウンは識別能力の概念を用いた自分の説明の適用範囲を、科学的知識の乏しい共同体に限定する。科学的知識の豊かな共同体では、自然種の識別により高度なテストを用い、その結果も表面的特徴の一つとすることができる(Brown, 1998, p. 284)。彼女は自説を科学的知識の豊かな共同体にも適合するよう拡張可能だと考えてはいる(ibid.)が、とりあえず私も以下では、その限定の範囲で話を進めることにする。

15) ブラウンは識別能力の分業を認める(Brown, 1998, pp. 284-5)。共同体の一部の人の識別能力に、他の人が依存することができる。

16) なおこの日常的環境とは、単に場所を表すのではなく、日常接する環境のことである。H₂Oの外見上の双子XYZが地下に大量にあっても、日頃接していなければ、ここで言う日常的環境には含まれない。

また後で問題になるが、H₂Oに特殊な加工をして、表面的特徴を変えることが可能だとしても、日常的環境にそうした加工がなされたH₂Oが存在しない限り、その可能性は自然種名の指示の決定に全く影響しない。

17) ブラウンはこの他、ある自然種に属するかどうかは根本的性質によって決定されるということを理解している必要があるとする(NKTRC, pp. 286-7)。銀のように見えるものが銀しかない環境下では、銀の識別能力と銀のように見えるものの識別能力は同じように働く。その場合、「銀」を銀の識別能力に基づいて用いていることが保証されるには、銀であるための必要十分条件は何らかの根本的性質を有することだと理解し、その性質を有さなければ同じ表面的特徴を有していてもその種に属しないと判断する用意がなければならない。

なお、このことを明確かつ意識的に理解することは求められず、諸事例においてこれに沿った判断をする傾向性を持つことのみ要求される(NKTRC, p. 287参照)。

だがごく微量の塩化ナトリウムNaClは、人には例の味がせず、しかもそうしたものは日常的環境に接触可能な形であるかもしれない。とすると、「塩」はNaClを表さないのだろうか。これも、必要なのはある表面的特徴を通じて、日常的環境である根本的性質を持つものを選び出す能力であり、その性質を持つ全てのものを識別する能力ではないので、問題とならない(NKTRC, pp. 295-6参照)¹⁸⁾。

金の同位体の問題はどうか。我々が「金」と呼んできたものの大半は、Auの特定の同位体Au¹⁹⁷である。Au¹⁹⁷と他の同位体は日常生活レベルでは区別がつかないが、今までの議論からいくと、我々は日常的環境下でのAuの識別能力だけではなく、Au¹⁹⁷の識別能力も持っていることになるのではないか。ブラウンはこれに対し、Au¹⁹⁷でも他の同位体でも、表面的特徴に寄与しているのは元素レベルの差異までであり、同位体レベルの差異は寄与していないので、我々が有している識別能力はあくまで元素レベルのものだと主張する(NKTRC, pp. 294-5)¹⁹⁾。

以上のように識別能力説は、K-P見解が対処できない自然種のレベルに関する諸問題に、うまく対処できると考えられる。

3-2. 混合物の問題^{20), 21)}

3-2-1. 問題の概要とブラウンの説明 例えば我々が水として認めてきたものの大半は100%のH₂Oではなく、若干のH₂O以外のものを含んでいる。

18) さらに日常的環境下でも、色・光沢などが表面的特徴とされている種を、暗がりの中などの悪条件下でまで確実に識別することは必要でない。必要なのは日常的環境下で、その表面的特徴を知覚を通じて十分把握できる場合に識別する能力である(NKTRC, p. 289参照)。

19) つまり「表面的特徴をもたらしめている根本的性質」とは、詳しく言えば、以下の条件C1を充たす根本的性質全てということになる。

C1) 現実の日常的環境下において、その種の識別に用いられている表面的特徴を持つものがその性質(と、その性質に不可避免的に伴う性質)を失ったならば、その表面的特徴もまた失われる。

金に関して、「1B族の元素である」という性質は条件C1を充たすが、その性質を持つだけでは条件C1を充たす根本的性質全てを持つわけではない。1B族の特定の元素Auであるという性質も条件C1を充たすからである。

なおここで言う「不可避免的に伴う」というのは、あくまで日常的環境が成立している範囲での話である。Auが現実とは異なる光の反射-吸収特性を有することが可能でも、問題とはされない。

20) NKTRCの他、後に見るようにチョムスキーらもこの問題を指摘している。

すると「水」は H_2O , 「 H_2O であるもの」を表さないのではないか. H_2O の純粋なサンプルも不純なサンプルも H_2O を例示できる, と主張されるかもしれないが, 海を満たす液体や川を流れる液体よりも往々にして H_2O 比率の高い, 紅茶や一部のスポーツ飲料のようなものは「水」と呼ばれない. 水が純粋な H_2O のサンプルと不純な H_2O のサンプルの一部(その選出基準は, 単に H_2O 比率によるものではなく, 何か別の配慮が働いている)によって例示されるのだとしたら, 「水」が表すのは H_2O 主体であることに加えて, 何か主観的関心からくる条件を充たすものではないのか(NKTRC, pp. 280-1).

あるいは, 次のように考えるべきか——水とされてきた液体 L_1 , L_2 , L_3 ……は, その大半が「その大部分が H_2O である液体」である, つまり「 L_1 の大部分は H_2O である」「 L_2 の大部分は H_2O である」……が成り立つ. これらの液体を全て一つの(途方もなく)大きな鍋に集めたと仮定すると, 鍋の中身の大半は H_2O である, つまりその大半が有するような根本的性質とは H_2O であることなので, H_2O を表すということになるのだろうか²¹⁾.

しかし, ルビーと見なされてきたものの大半は酸化アルミニウムに, 少量のクロムが混ざったものである. 大鍋論法で行くと, ルビーは酸化アルミニウムということになる(NKTRC, p. 283参照). クロムは水に少々混ざった塩や泥のようなもの, というわけだ. すると, 「ルビー」と「サファイア」は同じものを指すということになる——サファイアと見なされてきたものの大半もまた, 酸化アルミニウムにそれ以外の少量の成分の混ざったものだからである(ibid., p. 283).

このように, K-P見解は混合物の問題を納得のいく形で解決できないように思われる. これに対し, ブラウンはここでも, 識別能力の概念を用いて説明しようとする. 言語共同体LCの日常的環境下において, NaClが他の

21) ここで扱うのは物質の混合の問題であり, 生物の混血の問題などは今後の課題としたい. 物質の混合の場合, NaCl水溶液はNaClと H_2O を含んでいるが, ラバは馬であるような生物個体やロバであるような生物個体を, それと同じ意味で含んではいない. 他にも様々な差異を考察しなければ, 物質の混合に関して言えることを生物の混血に当てはめるわけにはいかないからである.

22) ブラウンは前の段落の説をクリプキ説, この段落の説をパトナム説と見ており, 混合物の問題に関して違いが生じると見なす. この解釈には議論の余地があると思うが, どちらの説も問題を十分に解決できないのは同じなので, 本論文の本筋から外れるこの解釈問題には立ち入らない.

ものと混ざった形でしか存在せず、そのため人々が塩と見なすものも純粋なNaClではないとしても、人々が塩の識別にその味を用いており、その味をもたらししているのがNaClの存在だとしたら、NaClを表すのに必要な識別能力を有している(NKTRC, pp. 295-6).

この立場で、ルビーの事例も説明できるとブラウンは考える。ルビーと見なされてきたもののほとんどは、酸化アルミニウムを主成分とするが、日常的環境下でその表面的特徴はさらに、少量のクロムを含むことでもたらされている。そのため、ルビーの識別の際に働く、周知の色や輝きなどの表面的特徴に基づく識別能力は、日常的環境下における単なる酸化アルミニウム化合物の識別能力ではなくて、酸化アルミニウムの他に少量のクロムを含む周知の宝石の識別能力であると考えられ、よって「ルビー」はその宝石を表すと考えられる(NKTRC, pp. 296-7)²³⁾。

3-2-2. ブラウン説の問題 しかし彼女の説明にも、いくつかの反論が考えられる。

第一の反論。言語共同体LCで「水」と呼ばれているもののほとんど全てに、 H_2O の他に、味などに影響がない程度の微量のNaClが含まれていたとする。識別の際に用いられる表面的特徴は周知の色・味・質感などである。この場合、その味・色などの特徴は、 H_2O によってもたらすことができるだろうが、 H_2O と微量のNaClの混合物であってももたらすことができる。すると、「水」は H_2O と微量のNaClの混合物を表すと考えることができるのではないか。

これに対し、 H_2O と微量のNaClの混合物は自然種ではないので、自然種名の指示対象にはなりえない、という主張も考えられる。しかしそう主張すると、ルビー(酸化アルミニウムと少量のクロムの混合物)が自然種かどうか問題となる。この立場は、 H_2O +微量のNaCl絡みの反論を抑えることはできるかもしれないが、「ルビー」などの実際の指示を、識別能力説で説明することができなくなる²⁴⁾。私はルビーが自然種ではないとしても、自然種を特徴づけるような根本的性質(化学的組成など)で特徴づけられる限

23) ブラウンはこうした議論を一応示すものの、彼女自身は混合物を自然種とは認めず、この場合「ルビー」は指示を欠くと考え(NKTRC, p. 297)。それでも、少なくとも酸化アルミニウムや、「サファイア」と同じものを表すことはない。

24) 注22で述べたブラウンの見解は、この問題に直面する。

り、「ルビー」が指示を欠くという結論を導きたくない²⁵⁾。

第二の反論。我々と似た環境(H_2O と外見上よく似た別の物質などない)で暮らしているある共同体では、我々が純粋な水ないし不純な水として認める全てのもの、そしてそれらのみを「水」と呼ぶ。識別の際に用いる表面的特徴も同じである。しかし少し赤みがあったものを純粋な水と見なして、我々が純粋な水と見なすものは少し色の薄い不純な水と見なしている。この人々は H_2O を指示していると言えるだろうか。この人々が何を水と識別するか、どんな特徴に基づいて識別するかは、我々と同じである。しかし、この人々が H_2O を指示しているという帰結は受け容れがたいものに思われる。

私の考えでは、こうした問題を解決するには、識別能力説に若干の修正ないし補足を加える必要がある——物質種名が何を表しているかは、その種の成員の識別に用いられる表面的特徴に加えて、その種の成員の純粋性に関する想定によって決まる²⁶⁾。同じ日常的環境下で、同じ表面的特徴に基づいて種の成員の識別を行っていても、純粋性に関する想定が異なれば、同じものを表していると思なせない場合がある。

25) 私の立場では、ルビーが自然種でなければ、「ルビー」は厳密には自然種名ではないことになる。しかしそれでも、「ルビー」を実際に自然種を指す名辞と共に論じることには意味があると思われる。もしルビーの表面的特徴がある自然種に属することでもたらされるならば、「ルビー」はその自然種を指すことになっただろう。一方実際に自然種を指す名辞でも、その表面的特徴が何らかの自然種に属することでもたらされなければ、自然種を指さなかっただろう。

26) パトナムも後になって自然種名の議論に純粋性の概念を用いるが、 H_2O と表面的には似ているが化学的組成の異なるXYZのようなものは、昔も今も水ではない、という自説の補強にそれを用いる。彼の議論はこうである——水は昔から純粋な物質と想定されていたが、それは一つには、どんな水も、他の水と同じふるまいを示すと想定されていたということである。昔の人にせよ現代の我々にせよ、純粋な水のどんなサンプルも、他の純粋な水のサンプルと同じように振舞うと予期している。よって H_2O と表面的には似ているが化学的組成の異なるものは、昔も今も水ではない (Putnam, 1988, p. 30)。

彼は自分の言う「純粋性」について、Putnam, 1988の他の箇所でもあまり詳しく語っていないが、彼の「純粋性」を「同じ化学的組成を持つものだけから成ること」のようにとると、彼が主に想定しているXYZの例には有効でも、例えばルビーとサファイアは共に酸化アルミニウムということになる。それを回避しようとして、混合物についても純粋性が言えるように単純に拡張すると、本文で前に挙げた例において、「水はわずかにNaClの混ざった H_2O 」という考え方が出てくるのを抑えられない——わずかにNaClの混ざった H_2O のどの「純粋な」(NaClと H_2O 以外含まない)サンプルも、他の「純粋な」サンプルと同じように振舞うだろう。結局、水などの「純粋性」についての本論文のような説と合わせてでないと、彼の説は受け容れられないと思われる。

例えば昔の人が水として認めるであろうものには、澄んだ水も、泥混じりの水も、塩水もあるだろう。しかし泥混じりの水や塩水は、あくまで不純な水、水以外のものが混ざった水として認められているにすぎないだろう²⁷⁾。一見混じり気のない純粋な水に見えるものでも、微量の塩が含まれていると昔の人が納得したならば、実は純粋な水ではなくて、わずかに塩の混じった水だと考えるだろう。このように、純粋な水、混じり気のない水の特徴として、無色透明で味がなく、などの特徴が想定されており、その特徴に貢献するものだけを含むものが純粋な水だと想定されているならば、「水」で H_2O を表していると考えてよい。塩は純粋な水の特徴に貢献していない(塩自身は純粋な水の特徴を備えておらず、塩を含むその特徴を有するものから塩を除いてもその特徴は失われない)ので、「水」が塩混じりの H_2O を表すことにはならない。

一方純粋な水の特徴として、少し赤みがかかった色などが想定されているならば、その特徴は H_2O だけではもたらせないので、「水」は H_2O を表さず、 H_2O とその赤みをもたらしのに必要な成分の混合物を表すだろう。

またルビーの例だが、ルビーに含まれている少量のクロムをルビーから除去すると、ルビーはその表面的特徴を失う。よって「ルビー」は単なる酸化アルミウムではなくて、少量のクロムを含むものを表すのである。

3-2-3. 成分+ α ?—さらなる反論と返答 昔の人が「水」と言う時、現代の我々同様 H_2O を表していたとする主張に対し、次のような反論をする人(Malt, 1994; Chomsky, 1995; LaPorte, 1998など)がいる——我々が純粋な H_2O でない液体を「水」と呼ぶ基準は、その液体の H_2O 含有比率に基づくものではないように思われる。 H_2O 含有比率の比較的高い紅茶やスプライト、乳児や鶏を「水」と呼ばず、それより H_2O 含有比率の低い、グレート・ソルトレークを満たす塩水(約28%もミネラル分——多くはナトリウムだろう——を含む)や、川を流れる土砂混じりの液体を「水」と呼ぶ(Malt, 1994, pp. 44ff. とLaPorte, 1998, pp. 451-3参照)。そしてこれは、単に外見からいったんそう判断されるというだけでなく、 H_2O 比率を知った後でもまず訂正されな

27) 昔の人が純粋/不純の概念を有していたか疑われるかもしれないが、「混じり気のない水」「水以外のものが混ざっていない水」などの、一種の純粋性概念を有していたとは考えられる。

い(恐らく、昔の人が同じ知識を得ても同様だろう)。従って、「水」が H_2O を表している、少なくとも単に H_2O を表しているとは言えない。それは H_2O 主体の液体であることに加えて、出所・場所・人間にとっての機能などが一定の条件を充たすような液体を表す——。

これは、「水」などはそもそも自然種を表すための表現でないという議論だが、これに対し、本論文の立場からはまず以下のような反論がある——不純な H_2O はあくまで水以外のものを含む水として認められているだけで、水以外のものを含まない水はあくまで純粋な H_2O なのだから、水= H_2O 、水以外のもの= H_2O でないもの、ということがこれでもう言えている。「水以外のものを含む水」に H_2O 比率の高いあれが含まれない、比率の低いこれが含まれる、といったことは問題とならない——。

また、水かどうかなどの判断に、成分以外の配慮が働いていることを示すのにチョムスキーらが出した例は、大方の物質種名は自然種(あるいはとにかく、何らかの根本的性質のみによって特徴づけられる種)を表すという本論文の立場から十分説明可能である。

例えば、乳児・鶏などが水でない理由は、次のように見ることができる。

水入りのビニール袋を指して「この水」と言うと、ビニール袋は含まれない。水入りビニール袋全体を指して、「この水」のように言うことは決してない。

一個の細胞を考えよう。細胞は細胞膜で包まれる形になっている(植物の場合、さらに細胞壁で包まれる)。細胞膜は主に脂質と蛋白質からなる。この二つの物質は水ではない。つまり細胞はある意味、先ほどの水が入ったビニール袋と似ている——少なくとも、水でないものの中に水が何らかの形で入っているという構造だけは同じである。さて、細胞は水だろうか。もちろん、そうではない——先程の水入りビニール袋がそうでないように。細胞膜は細胞の一部であって、ビニール袋に入った水にとってのビニール袋のようなものではない(なお細胞壁の主成分、多糖類のセルロースも水ではない)。

話を乳児や鶏に戻すと、これらは大まかに言って細胞の集まりである。細胞が水でない以上、細胞の集まりであるこれらも水ではない。このように、乳児・鶏などの H_2O 含有率がいくら高くても、これらが水ではないのは

本論文の立場で十分説明がつき、出所などの基準を持ちこむ必要はない。紅茶やスポーツ飲料の場合はどうか。これらについては、「水」と呼ばれないのは語用論的含みから来るもので、意味論的には「水」の外延に含まれている、と考えられる。

確かに、飲食店で客が「水を持ってきてちょうだい」と言ったのに店員が紅茶を持っていくと、「何で紅茶を持ってきたの？ 私は水を持ってきてって言ったのよ」と言うかもしれない(その紅茶がタダだとしても!)。しかしこの状況で店員は、「これは水ですよ。紅茶成分の含まれている水です」と言うこともできる。恐らく、こう言うことは普通店員自身のためにならないだろう。客が怒り出しても不思議はない。しかし我慢強い客が、「わかったわよ。じゃあすまないけど、もう一度水を持ってきてちょうだい——今度は紅茶の入っていない、ただの水をね」と言っても、おかしくはない。

店員の「紅茶は紅茶成分の入った水」発言を、「水は水素が結合した酸素だから、酸素の一種」や、ましてや「水は一種の銀」(字義通りの意味なら明らかに偽)などと同等に捉えるべきではないと思われる。泥混じりの水、絵の具が溶けた水などと同様、紅茶成分の入った水を不純な水の一種に数える用法が、「水」にはあると考えられる。

従って、上の事例は次のように分析することができる。客の最初の発言「水を持ってきてちょうだい」の「水」に紅茶が含まれないというのは、何らかの語用論的含み、恐らくはグライスの言う一般的な会話の含みだと考えられる²⁸⁾。グライスによれば、一般的な会話の含みは個々の事例では取り消し可能である。店員の発言は、普通「水」と言う場合の、紅茶は含まれないという含みを明示的に取り消したものと見なせる²⁹⁾。

28) 「水」と言った時に紅茶が含まれないのは恐らく一般的な会話の含みだが、ここでの例で、その「水」には泥の入った水も含まれていないだろうが、それは「あの川の水は汚れている」と言う場合には普通ない含みで、文脈依存的な含みと考えられる。詳しくはGrice, 1975参照。

29) これに対し、「水」は多義的であり、紅茶成分の入った水などを含む意味と、含まない意味があるのだ、と言われるかもしれないが、まず本論文の解釈を拒みその解釈を採る積極的理由が見当たらない。そして紅茶を含む/含まないと似た事例は、泥水についても考えられる(食堂で「水をちょうだい」と言う時泥水は想定範囲内ではないが、「川の水が濁っている」と言う時は想定範囲内)し、他の様々なものについても考えられる。各事例の想定範囲に何が含まれ何が含まれないかは、非常に多様でありうるし、無限に多様でありうるかもしれない。それらを全て多義性で説明する立場が、意味論的に健全かどうかは大いに疑問である。

さらに、成分が同じものが水であつたりなかつたりする例として、チョムスキーらが挙げているものを検討したい。彼らの主張が正しければ、成分的には水の条件を充たすが普通水ではないものも、出所などの条件を充たせば水である。そして普通水であるものも、それらの条件を充たさなければ水でない。

本当にそうだろうか。チョムスキーの例を見てみよう。彼は普通紅茶が水だとは認めないわけだが、水道施設の中で、各家庭に供給する水にティーバッグが浸されるようにし、通常の紅茶と同じ成分にして蛇口から出るようにしたら、それは水で紅茶ではないと主張する(Chomsky, 1995, pp. 22-3. 例は要旨を損ねない程度に一部変更した)。これは極めて不可解である。蛇口からその液体が出てきた時、見た人は当初紅茶とは思わないかもしれない。いくら紅茶の色つやなどを有していても、即座に紅茶と判断するには、蛇口から出る液体についての常識が邪魔をするかもしれない。最初は、水道管の錆が溶け出した赤い水くらいに思うかもしれない。しかしその色つやをよく見て、匂いをかぎ、思い切って味見すれば、普通の人は紅茶と認め、その後普通は「水」と呼ばなくなるだろう。「水」と呼ばれない傾向にあれば水ではない、と考えるチョムスキーらにとって、従って普通「紅茶」と呼ばれる成分比率の液体は、出所などの基準と無関係に、常に水でないということになる。とすると、そうした液体が水でない(彼らの見地からは)のは、彼らが言う条件によるものとは言えなくなる。

またモルトの次のような例もある——オンタリオ湖の汚染された水は、ある写真現像業者によって(仮定の話でなく実際に)利用されている。現像に用いられる液体が直接オンタリオ湖から得られたもので、そのため湖から得られたという出所についての事実や、その液体が湖の水のもともとの機能の少なくともいくつかを有していたような、その液体が普通ある場所についての事実が強調されていれば、その液体は水と見なされるだろう。同じ不純な液体が容器に詰められ、写真の現像用に店で売られれば、それは現像液と見なされ、「その新たな場所にあつて、それが新たな意図された機能を有するにも拘わらずそれを“水”と呼ぶのは、不適切かつ誤解を招くと思われる」(Malt, 1994, p. 57)。

その状況で「水」と呼ぶことが、不適切かつ誤解を招く、という言い方を

彼女がしていることにいったん目をつむるとしても（単に不適切なだけなら、それは水なのだが、語用論的事情から「水」と普通呼ばれないだけかもしれない）、やはりこれが正しいとは思えない。我々は、それらしい瓶に入って現像液として売られていて、実際現像液として機能する液体を、水とは考えにくいかもしれない。しかしそれは事情を知らない間のことであり、知ってしまえば、「この現像液はこんな立派な瓶に入って結構なお値段で売られているけど、実はオンタリオ湖の汚染された水にすぎないのさ」と言うことはできる。その液体の出所などについてのどんな事実がクローズアップされる状況でも、それが汚染された水であることに何ら変わりはない。

このように、チョムスキーらが提出している、成分が同じでも出所など次第で水であつたりなかつたりするという例は、いずれも誤りである。さらに次の例も考えられる。彼らの見解通り、あるスポーツ飲料³⁰⁾が水でないのがその出所などの条件のためで、条件次第では水であるどんな液体も、そのスポーツ飲料とその条件で一致すれば水でない³¹⁾というのなら、純粋なH₂Oも、同じ工場で製造され、同じ容器に入れられ店の同じ売り場で売られ、飲用に供され体内の水分補給などに役立つならば、水でないということになる。しかしこれは信じがたい。それは正真正銘水である。純粋なH₂Oは、出所などがどうであれ水である。純粋なH₂Oのそれらの条件を、どれだけそのスポーツ飲料などに近づけても、たとえ特殊な加工をして、成分的には純粋なH₂Oのまま、色や味などまでそれらに近づけることができたとしても、それはその水がそのように加工されたということであり、水であることには変わらない。

以上のように、一見「水」などが自然種を表していないかのような事例も、自然種名の外延に含まれるための必要十分条件に、出所などの条件が含まれているという十分な証拠とは言えず、それらは自然種ないし何らかの根本的性質のみによって特徴づけられる種を表す、とする立場から十分説明

30) スポーツ飲料の中には、ほとんど常に「ちょっと不純物が入った水」のように言うのが自然であるものもあるかもしれないが、ここではそうでないもの——「水を持ってきてくれ」と言われて持っていくと変な顔をされるようなもの——を想定している。

31) ただしその液体がそのスポーツ飲料になるかは、チョムスキーらの自然種名に関する見解だけからは言えない。チョムスキーの主張には「紅茶」などの非自然種名に関する見解も含まれているが、ここでの議論には不必要なので、これ以上立ち入らない。

がつくと思われる。

4. 結 論

自然種名の指示についてのK-P見解は、自然種のレベルの問題と混合物の問題をうまく解決できない。ブラウンの識別能力説は、前者はうまく解決できるが、後者に関してはなお問題が残る。物質種名に関して、純粹性に関する想定説で補う必要がある。チョムスキーらの、物質種名は成分条件に加えて出所などの条件を充たすものを表すという説には十分な根拠がなく、彼らが出している例は全て、出所などの条件を求めない本論文の立場で十分説明がつく。

文 献

- Brown, J. A., 1998. "Natural Kind Terms and Recognitional Capacities," *Mind*, 107, pp. 275-303. (略称NKTRC)
- Chomsky, N., 1995. "Language and Nature," *Mind*, 104, pp. 1-61.
- Donnellan, K. S., 1983. "Kripke and Putnam on Natural Kind Terms," in C. Ginet and S. Shoemaker (eds.) *Knowledge and Mind: Philosophical Essays*, New York: Oxford University Press, pp. 84-104.
- Evans, G., 1982. *The Varieties of Reference*, Oxford University Press.
- Grice, H. P., 1975. "Logic and Conversation," in *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, 1989, pp. 22-40.
- Kripke, S. A., 1980. *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (略称NN)
- LaPorte, J., 1998. "Living Water," *Mind*, 107, pp. 451-5.
- Malt, B. C., 1994. "Water Is Not H₂O," *Cognitive Psychology*, 27, pp. 41-70.
- Miller, R. B., 1992. "A Purely Causal Solution to One of the Qua Problems," *Australasian Journal of Philosophy*, 70, pp. 425-34.
- Putnam, H., 1975. "The Meaning of 'Meaning,'" in *Mind, Language, and Reality*, Cambridge University Press, pp. 215-71. (略称MM)
- Putnam, H., 1988. *Representation and Reality*, The MIT Press.
- Searle, J. R., 1983. *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge University Press.